

## 筑紫神社



筑紫神社



「国号起源」の扁額

筑紫野市原田、旧国道三号沿いの小高い丘の上に筑紫神社は鎮座しています。江戸時代、丘の裾を長崎街道が通り、筑紫神社の表参道は、長崎街道筑前<sup>ちくぜん</sup>宿の一つ「原田宿」につながり賑わいをみせていました。

この地は江戸時代よりずっとずっと昔から交通の要衝でした。奈良時代の『筑後国風土記』逸文（釈日本紀所載）に次のような話が載せられています。

筑後国と筑前国は、もとはあわせて一つの国であった。むかしこの両国の間の山に狭くて険しい坂があつて往来の人が乗る馬の鞍が磨り尽くした。それで土地の人はこの坂を「鞍鞣<sup>くらしたくら</sup>尽くしの坂」と言った。

三に云う。この堺の上に 鹿猛神<sup>あらくたけきかみ</sup>がいて、往来の人の半分は生きて通ることができたが半分は死んだ。その数があまりに多いので「人の命尽くしの神」と言った。そこで、筑紫君と肥君<sup>ひのみかみ</sup>がこれを占い、筑紫君等の祖甕<sup>みかより</sup>依姫<sup>よひめ</sup>を祝としてこれを祭った。以後行路の人が神害を被ることはなくなった。そこでこの神を「筑紫の神」と言った。

四に云う。その死者を葬るために、この山の木を伐り棺を作ったために山の木が尽きようとした。よって筑紫国という。後に二つに分かれて前-後となった。

いわゆる、「筑紫」の地名起源説話であり、これからすれば、筑紫は元来「ツクシ」という地名（神名）に「筑紫」という好字を当てたものだといえることができるでしょう。

「筑紫の神」について「後に祝祭<sup>まつり</sup>て筑紫ノ国御笠郡筑紫神社あり、此神なるべし」といったのは、『古事記伝』の著者本居宣長でした。

筑紫は『古事記』『日本書紀』において重要な地名として登場します。しかし不思議なことに記紀神話に「筑紫の神」は登場しません。そのため江戸の国学者の間で、筑紫神について記紀神話にあてはめ、素戔鳴尊<sup>すさのおのみこと</sup>の子で新羅から樹種を持ち帰り日本全土に植えたという「五十猛命<sup>いただけるのみこと</sup>」であるとか、筑紫の国魂「白日別<sup>くじたま しらひわけ</sup>」であるなどの説が出されますが、青柳種信は、「筑後国風土記には鹿猛神とのみあり五十猛神という事は見えない。これはこの地に鎮まる土地神であろう」と言っています。

筑紫神社の拜殿正面には、幕末・明治維新时期に活躍した公卿大原（源）重徳が揮毫した堂々たる「国号起源」の額が掲げられています。その奥中央には元禄 12 年（1699）山内次左衛門が寄進した交野三位時香<sup>かたのさんみんとしあか</sup>卿の筆になる金文字鮮やかな「筑紫宮」、その左に「宝満大神」、右に「田村大神」の大きな扁額が掲げられています。筑紫神社には「筑紫の神」の他に、玉依姫命<sup>たまよりひめのみこと</sup>（宝満大神）、坂上田村麿<sup>さかのうえのむらさき</sup>（田村大神）をお祀りしています。この二神が何時併せ祭られるようになったかは明らかではありませんが、延宝 9（1681）年の『筑紫神社縁起』にはすでに見られ、坂上田村麿は、中世筑紫神社の祭祀を司っていた筑紫氏の先祖であるため、宝満大神は御笠郡の惣社であるためとしています。

『延喜式』神名帳に筑紫神社一座は名神大社に列せられています。延喜式神名帳に記載された神社は、平安初期に官社とされた神社で、後々の時代まで高い格式の神社としての扱いを受けました。現在の福岡県にあたる地域では26座16社、筑紫地区では宝満山の竈門神社と筑紫神社だけでした。

『類聚符宣抄』天元2年(979)、宗像宮に大宮司を置くことを命じた太政官符に「住吉・香椎・筑紫・竈門・筥崎等の宮は大宮司を以て貫主となす」とあります。筑紫神社には、これら大社と同じように「大宮司」がいたことが知られます。

鎌倉時代からは筑紫氏が社司を兼ね、享徳2年(1453)には、筑紫経門、俊門によって社殿が造営されました。この頃、原田宿の南の外れにある祇園社を御旅所として神幸が行われていたと『縁起』に記されています。しかし戦国時代、筑紫氏が勝尾城(鳥栖市)に本拠を置き、天正14年(1586)鳥津勢に攻められ落城した時、筑紫神社の神領も没収され、神宝・古文書類も兵火に遭い、祭りも途絶えたと伝えられています。

江戸時代は、筑紫氏の流れを汲む山内氏が、ただ一家遺り社職を継ぎました。寛文2年(1662)造営の社殿は、延宝8年(1680)火災に遭いますが、翌年、筑紫・原田の村人が力を合わせて神殿・拝殿・大門を再興しました。また貝原益軒も、黒田藩主から資材を賜り正徳2年(1712)に社殿を造営するなど、復興に尽力しています。境内最古の元禄12年(1699)の石鳥居についても、額の揮毫を花山院内大臣定誠に、両柱の銘文を官梅道栄に依頼しています。

照葉樹に包まれた境内を歩くと、鳥居にも石灯籠にも狛犬にも、石段にも、粥占祭のお粥に用いる水を汲む井戸の枠にも、絵馬にも、江戸時代から現在に至るまで、それらを寄進した多くの村人の名を見ることができます。還暦や古希の祝に、伊勢参宮の記念に、同年代の友達がお金を出し合って寄進したもの、あるいは金婚式の記念に夫婦連名で寄進されたものもあります。原田・筑紫の氏子の人々が人生の節目節目に、氏神様に感謝の気持ちを捧げた証です。

絵馬堂では、文政5年(1822)以来奉納された多くの絵馬と共に、梵鐘の写真が眼を引きます。この鐘は永徳4年(1384)に筑紫大明神の神徳を讃えて太宰府の横岳崇福寺の岳雲宗丘が奉納しましたが、現在は名刀長船で有名な岡山県瀬戸内市長船の慈眼院に蔵されているということです。『筑前国続風土記附録』には薬師

堂、観音堂の存在を記しており、江戸期までは神仏習合していたことが窺えます。

明治維新の社格制度により、明治5年(1872)に郷社に定められ、その後一時村社とされますが、大正4年(1916)には県社に昇格しました。同年、原田・筑紫村内にあった無格社五社が筑紫神社境内に移転、合祀され五所神社として参道右手に祀られました。また両地区にあった猿田彦、庚申などの石神も、左手稲荷社の側に集め祀られています。

境内に立つ詩碑。筑紫出身の詩人安西均は高らかに故郷とその産土の神を讃えています。



#### 遙かな古代

筑前・筑後を合わせて「筑紫の国」と名づけ九州を「筑紫の島」とさえ称した

ああ かくも大なる筑紫

ここはその発祥地であり中心地である

ここ筑紫のまほらばに鎮まる産土の神はわれわれの遠い祖先の喜びであり

現代のわれわれの誇りであり

われわれの子孫が受けつぐべき聖域である

(森 弘子)

#### 【関連】

ちくしの散歩 粥卜—筑紫宮の農業祭事

1992・3・31

ちくしの散歩 詩人・安西均 1995・3・31

#### 【参考文献】

『福岡県の神社』2012 (財)アクロス福岡  
安西均『宛名を忘れた手紙』1986 鉦脈社